

先週の礼拝メッセージ(2023年9月10日) ベン牧師

「主の教えを喜びとする」 詩篇 1:1-6

詩篇 1 篇は、「幸いな者」という言葉で始まっています。

「幸いな者/悪しき者の謀(はかりごと)に歩まず/罪人の道に立たず/嘲(あざけ)る者の座に着かない人。」

謀とは頭の中で考えること、道とは行動、嘲るとは言葉での中傷です。思いと行動と言葉によって 罪を犯すというのは今も昔も変わっていません。それらをしっかりと制御する者は幸いな者だということです。もう一つここから読み取れることは、歩む、立ち止まる、座に着くというふうには、罪の深みにはまっていく様を記しています。これくらいならいいだろう、今日だけなら大丈夫と、曖昧にしていくと、罪はどんどんと侵食してきます。そして歩みが止まり、立ち止まり、拳句に果てには罪の中に座り込んでしまうということが起こるのです。ですから幸いな者とは、罪を遠ざける者なのです。イエス様を信じていると言いながら、罪を犯しても平気でいられるということは本来あり得ないのです、私たちはイエス様の十字架による救いに預かり、すでに幸いな者とされたのです。失敗や弱さのゆえに罪を犯してしまうことはあるかもしれませんが、そのまま平気ではいられないはずです。イエス様のもとに行き、悔い改めて赦しを受け、再出発する、これがクリスチャンの本来の姿です。

1 節では「・・・しない」ことが記されていましたが、2 節では「・・・する」ことが語られます。

「主の教えを喜びとし/その教えを昼も夜も唱える人」が幸いな者であるのです。

主の教えとは、原語では「トラー」、律法を指します。モーセ五書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)です。また、唱えるとは、暗唱する、瞑想すると言ったことを意味します。現代と違い当時は、聖書は祭司や宗教の指導者などごく限られた人しか読むことはできませんでした。ですから、一般の人は聖書を口伝えに聞き、暗唱するしかありませんでした。イスラエル人の男子の成人(満 13 歳)は、モーセ五書の暗記が必須でしたから、皆が覚えていました。

ですから 2 節を現代風に言い換えると、「主の律法を喜びとし、その教えを読み、昼も夜もそれを瞑想する人」ということになります。

私たちが神に喜ばれる歩みをするためには、みことばに触れ、みことばを味わうことは重要なのです。良い行いや自分の頑張りでは、幸いな者とはなり得ないのです。

さらに幸いな者は、「流れのほとりに植えられた木のように。時に適って実を結び、葉も枯れることがない。その行いはすべて栄える。」と歌っています。

興味深いことに、勝手に生え出た木ではなく、ある場所から掘り起こされ、水の絶えない川のほとりに植えられた木だということです。主の言葉に思いを寄せ、神の前に正しく歩むために罪から遠ざかる人は、罪の世から取り出され、神の恵みの流れのそばに植えられた木のように、実を結び枯れることのない人生を送るのです。

「御父は、私たちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下へと移してくださいました。」(コロサイ 1:13)

そしてその人は栄えるのです。これは金持ちになるとか事業が成功するとかという意味ではありません。神様の前に栄える、神様がその人を放っておかない、守り導いてくださるという約束です。

反面、悪き者はどうでしょう。実を結ぶことのない籾殻のよう、神の裁きに耐えられないと記されています。

「人間には、ただ一度死ぬことと、その後裁きを受けることが定まっている」(ヘブライ 9:27)

すべての人は、神の裁きの前に立たなければならないのです。

「主は正しき者の道を知っておられる。悪しき者の道は滅びる。」(6 節)

神様に信頼する者を、神様は心に留めて守ってくださるのです。この幸いが実現するために、父なる神はひとり子イエス様をこの世に送ってくださり、人のすべての罪をイエス様が負って十字架で死んでくださいました。この福音を信じることこそ、罪の世から取り出され、神の恵みの流れのそばに植えられたということなのです。幸いな者とされたことを感謝し、主の教えを喜びとし、昼も夜も口ずさみながら、葉を茂らせ実を結び歩みをさせていただきましょう。